蒲團

〔近代世事談一〕夜著

慶長元和のころより專にすと云、むかしは小寢卷とて、常の衣服のすこし大きなるを下に卷て、そのうへに蒲團をかけて、上つかたもこれをめしたり、

〔婚禮法式下〕夜具之部

一小おんぞ二ツ、表綾、うらとのい物と同じ事なり、常の小袖より少大也、ふさなどはなし、

〔鈴鹿家記〕寶德元年卯月九日戊寅、花園殿ヨリ、略中小ヨギ一ツ御本所エ參、

〔嬉遊笑覽二上服飾〕また沙石集に、眠房の條正信ぬれたる小袖をふせごにかけて、焦れたる處あさましと思ひて、かひまきて持て參りぬとあり、搔卷にてかいのかないるべし、かいもちひなどのかいなり、今江戸にて夜著の小きをかいまきと云ふも詞同じ、

〔倭爾雅五衣服〕褥（シトネ）蓐、茵並同、有二臥席一、有二坐褥一、今俗呼二蒲團一、非也、蒲團者圓座之類也、

〔和漢三才圖會二十八衣服〕褥音肉　茵音茵　蓐音肉　和名之止禰　俗云蒲團

三才圖會云、黃帝內傳曰、王母爲帝、列七寶登眞之床、敷茸淨光之褥、疑二物、此其起耳、

按有寢褥、有坐蓐、其寢褥、表裏用繒帛木綿、坐蓐用錦綺、方三尺許、而中有唐華紋、尋常帛木綿氈及皮、其皮獵虎爲上、虎、豹、羊、熊、羚羊、狗等皆用之、夏月以蒲蘭等草作之、俗呼褥曰蒲團、出於蒲圓座之名乎、凡皮蒲團、夏掛架宜當風、如納櫃中不見風日則毛脫、

〔倭訓栞中編二十二〕ふとん　蒲團の音なり、されど蒲團は叢林語、圓座の類、國花集に溪の蒲をもて密に編ものと見ゆ、今臥褥の事とするは非也といへり、

〔貞丈雜記三小袖〕一今の世、夜具の內に蒲團と云ふ物あり、古はゑとねと云也、蒲團と云は圓座の事也、ゑとねの事をふとんといふはあやまり也、夜のゑとねをば、公家にてはよるのおましとも御すべりとも被申由也、古はゑとねの上にむしろを敷きて寢ぬる事也、